

展望

叙景歌の水脈

相川佑太

二〇二五年の数ある総合誌特集。そのなかでとくに惹かれて読んだもののひとつが角川「短歌」六月号から十一月号にかけて掲載された、詩人・高橋睦郎と歌人・大辻隆弘による往復書簡「叙景をめぐる」であった。

全六通にわたるその応答は、折口信夫が残した叙景論をふり返ることからはじめられる。たとえば次の高市黒人の歌に、折口は古代人による叙景鎮魂の典型を見出した。

いづくにか舟泊やまもとてすらむ安礼あなれの崎漕せうぎ
たみ行きし棚せななし小舟せなふね
旅たびにしてもの恋こひしきに山下やまもとの赤あかのそほ
舟沖ふねうきを漕せうぐ見ゆ

「小舟」は旅人である黒人自身の魂と重ねられ、その魂があてどなくさまようことの悲傷が「いづくにか舟泊てすらむ」や「旅にしてもの恋しきに」といった表現に託される。旅の途上にある歌人は、風景を叙することでその地の霊を鎮めるとともに、異土にあつて遊離よらしがちな自身の魂をも鎮めようとする。大辻によれば、このような折口の叙景鎮魂説からは「浮遊して止まない魂」と「その魂を

言葉に定位させようとする自意識」との「二つの心のベクトル」が読み取れるという。

折口の論を再読した後、高橋の疑問に大辻が答える形で、議論はやがて近代の叙景歌へと展開されてゆく。正岡子規が一八九二年に発表した文章「我邦に短篇韻文の起りし所以を論ず」では、自然を前にした「人間」主体に焦点が当てられる。子規にとつて「叙景」とは、その主体がみずからの「心裡」に生じた「表象」を言葉によつて写しとる行為にほかならなかつた。そして西洋思想に由来する同様の叙景観を作歌の拠りどころにして、子規に続く大正期のアララギ派は、万葉集の歌を「叙景」の名歌として読み直してゆく。大辻いわく、近代の概念を用いて古代を捉えようとするその態度は、「半ば意図的な錯視」に基づいていた。島木赤彦の次の一首は、そのような「錯視」から生まれた成果のひとつとしてあげられる。

岩あひにたたへ静あやむもる青淀あせなのおもむろ
にして瀬せに移るなり

しかも大辻によれば「古代人の感覚を理解

していた折口」さえもが、主体と客体の西洋的三元論から決して自由ではありえなかつた。論文「叙景詩の発生」において折口は、高市黒人の歌を古代の叙景鎮魂歌の嚆矢と見なす一方で、そのなかに看取される、自然という名の「客観」に対する主体の「観照態度」を重視しているという。子規にはじまる近代叙景歌の系譜だけでなく、折口自身の短歌観を考える上でも、見逃すことのできない指摘といえよう。

叙景という観点から短歌史を素描する大辻と高橋の以上の対話は、残念ながら、現代における叙景歌のありようには踏み込んでいない。今回語られることになかつたその問題は、書簡を読み終えたわれわれ読者が熟考すべき課題として残される。功罪両面があるにせよ「半ば意図的な錯視」によつて、短歌史の重要な一時代を築き上げたアララギ派的叙景歌の水脈は、現代短歌にどのように流れ込んでいるのだろうか。子規や赤彦の作品とは性格を異にする叙景歌が、どれほど試みられてきたのだろうか。そもそも今日の短歌において、叙景という概念はいかに把握されるべきか。このたびの全六通の往復書簡は、近代はもちろん、現代短歌の再検討をもうながしてくれ、興味深い特集であった。